

N. C. カクワニ

『所得不平等と貧困』

Nanack C. Kakwani, *Income Inequality and Poverty: Methods of Estimation and Policy Applications*, Oxford University Press, 1980, xvi+416 pp.

1

1960年代の後半以降、分配問題に対する経済学者の関心がよみがえった。その際、経済学者の関心は機能的分配(生産要素価格の決定および要素所得のシェアの決定・変動)には向けられず、むしろ人的分配に議論が集中した。ここで人的分配(personal distribution)とは、所得および資産の階層的分布の不平等を指している。関心がこのように変化した一因は、機能的分配のみによって人的分配を語る事が今日、不正確であり、したがって妥当性を欠いているという認識に求めることができよう。また成長にともなって人々が不平等により敏感になってきたことも指摘できよう。

近年における分配問題研究の成果はすでにおびただしい数の論文・単行本にまとめられており、代表的な文献として Sen(1973), Atkinson(1975)を挙げる事ができる。前者は不平等についての精緻な哲学に基づいたエレガントな公理主義的接近に特徴があり、後者は不平等は正策を念頭においた経済政策的接近に重点を置いている。しかるに不平等の実態を記述するのに必要な統計的処理方法については、手際よくまとめられた手頃な単行本がこれまでなかった。ここに紹介しようとしている Kakwani の新著, *Income Inequality and Poverty* は、このような空白をうめるものとして位置づける事ができる。

本書は Kakwani の6年間にわたる研究成果をまとめ

たものであり、*Econometrica*, *Review of Economic Studies*, *Economic Journal*, *Journal of Econometrics*, *Review of Economics and Statistics*, *International Economic Review*, *Economic Record* 等々に発表された教授の論文を中心にして構成されている。

2

本書は全体で6部17章から成る大著であり、したがって展開されている議論はいずれも包括的である。以下その内容を概括して示そう。

まず第1章は序論であり、本書の目的および限界、主要な論点を手短かに述べられている。第1部は分布関数(第2章)とローレンツ曲線(第3, 4章)の考察にあてられ、所得・資産の階層別分布を統計的に記述する方法を整理している。第2章ではパレート分布をはじめとする分布関数の型が批判的に紹介・検討され、第3章ではローレンツ曲線に対して複数の定義が与えられ、その性質が詳細に議論されている。ローレンツ曲線の規範的側面とくに社会厚生関数との関係は第4章で取上げられ、Atkinsonの定理とその一般化についての分析が簡潔に紹介されている。

ローレンツ曲線は交差するとき不平等の順序を与えることができない。第2部は不平等の測定に焦点をあて、ジニ係数をはじめとする不平等指標(完全順序を与える指標)を包括的に取上げて、その性質を議論している(第5章)。ここでは特に各指標の背後に存在する社会厚生関数に眼が向けられ、各指標に含まれている不平等判断の基準が明確にされている。なかでもジニ係数の背後に存在する社会厚生関数をめぐってたたかわされたAtkinson-Newbery-Sheshinsky-Senの論争が手際よく簡潔に要約されている部分は読者にとってきわめて便利である。第6章は、不平等を測定するのに利用される資料が一般には所得階層別に加工された2次資料であることに伴う問題点を議論している。この場合、同一所得階層内の不平等は無視されるので、計算された不平等度は原データから直接に計算されるものより小さく、過小評価された代物にすぎない。階層区分が粗いと、この問題点は大きくなる。Kakwaniは不平等度の上限・下限を議論した上で、みずからが案出した統計的補間方法を述べ、オーストラリアの所得分布データを用いてその適用例を示している。

第7章以下第15章までは、ローレンツ曲線の応用例が具体的に議論されており、著者の独創になる部分という意味において興味深い。とくに第8章ではローレンツ曲線の一般化が図られており、集中曲線およびその基本

的性質がいくつか導出されている。集中曲線とは消費・貯蓄・税額・所得・資産などの経済変数の分布を図示したものであり、ローレンツ曲線をその一部に含むものである。集中曲線の位置関係を調べることにより、これまであいまいな形で処理されてきた幾多の経済的議論を明確に整理しようと著者は主張し、その例を具体的に示している。ここで集中曲線の位置関係を調べるのに著者が利用しているのは集中曲線の弾力性だけである。集中曲線の弾力性比較は快刀乱麻のような切れ味を示し、読者を最後まで飽きさせない。とくに消費分布・所得分布・貯蓄分布の関係を議論した部分(第8章)や、税制とインフレーションの関係を分析した部分(第11章)、さらには税制の有する累進性や自動安定機能を数量化した部分(第12章)、貧困計測の指標を新たに案出しようとした部分(第15章)は注目に値する。

第16章は世帯規模のちがいを不平等や貧困を計測する際にどう処理するかという難問を議論している。いわゆる equivalent scale をめぐる問題である。ここでは従来の議論のサーベイが簡潔になされた後に、著者みずからの推計方法が示され、オーストラリアの資料を用いてその適用が図られている。

第17章は不平等・貧困を国際間で比較・計量している。不平等の測定にあたってはJain(1975)が集めた所得統計を利用しており、また貧困測定に際しては貧困線を1人当たり150ドル(1970年のアメリカ・ドル)に設定し世界銀行の資料を利用している。

3

本書の分析・説明に問題点がないわけではない。たとえば近年において研究の進められているジニ係数の一般化については言及されていないし、Thon(1981)が指摘したように貧困の指標を分析した第15章には誤りが含まれている(この点については高山(1981)ですでに言及した)。また国際比較を試みた第17章においては所得データの信頼性がチェックされていないため、計測された数字をみてもそれを額面どおりにうけいれるわけにはかならずしもいかない。

にもかかわらず評者は本書の公刊を心から喜びたい。不平等と貧困を分析しようとする者にとって本書に展開された統計的処理方法をめぐる詳細かつ包括的議論はきわめて有益である。本書をSen(1973), Atkinson(1975)と並ぶ代表文献のひとつにかぞえあげたのはそのためにほかならない。

[高山憲之]

参 考 文 献

- [1] Atkinson, A. B. (1975), *The Economics of*

Inequality, Oxford University Press (佐藤隆三・高川
清明訳『不平等の経済学』時潮社, 1981年)。

[2] Sen, A. K. (1973), *On Economic Inequality*,
Oxford University Press (杉山武彦訳『不平等の経済
理論』日本経済新聞社, 1977年)。

[3] 高山憲之(1981)「貧困計測の現段階」『経済研
究』32(4)。

[4] Thon, D. (1981), "Income Inequality and
Poverty: Some Problems," *Review of Income and
Wealth*, 27(2).

